「ただ信仰によって」（ローマ四・一三～二五）

1　ただ信仰によって

「ローマの信徒への手紙」は、先週から、第四章に入っています。今日はその後半になります。

前半から後半へ、しかしここで、この第四章で、テーマとして一貫して取り上げられているのがあります。アブラハムです。旧約聖書のもっとも重要な人物、イスラエルの父祖アブラハムです。

なぜここでアブラハムか、ということは、先週も少し申し上げました。この手紙の筆者パウロは、〈信仰によって義とされる〉という救いのメッセージ、すなわち、福音を、確かなものとして示すために、アブラハムに訴えているのです。アブラハムを、いわば証人として立てているのです。

〈信仰によって義とされる〉ということが、たんなるパウロの主張、あるいは思想ではなくて、聖書のメッセージ、真実の、昔から変わらない、確かなメッセージであることを、何が、あるいはだれが保証してくれるのでしょうか。それは聖書自身でなければならないでしょう。聖書、すなわち、神の言葉こそが、最終法廷です。もう少し言えば、イスラエルの父祖たちが、何をどう語り、どう行ったかということが決定権をにぎるのです。

しかしそうしたことを、だれであれ、パウロであれ、ただ単純に提示すればよいということではありません。聖書について、聖書の一つ一つの言葉について、ユダヤ教には解釈の長い長い歴史があり、伝統があり、これを越えた新しい見解など、容易なことではありません。

ことアブラハムについては、ユダヤ人たちが、父として尊敬し、誇りとしていた父祖です。彼をどのように理解するか、解釈するか、実際ユダヤ教においても、つねに大きな問題であったのです。

であればこそ、パウロは、アブラハムを問題にします。アブラハムをどう理解するかは、彼自身のメッセージが、それによって立ちもすれば倒れもする試金石だったと言うこともできます。アブラハムが私どもに残したものは何か、それをここで彼は問うのです。

> では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たというべきでしょうか（四章一節）。

これが四章全体に投げかけられているパウロの問いです。「肉によるわたしたちの先祖アブラハム」とありますから、この問いは、ここでは、「わたしたち」、すなわちユダヤ人に向けられています。

ちよっと分かりにくい訳ですが、別の言い方をすれば、アブラハムによって何が獲得されたのか、ということです。彼は、何を、私どもに、残したのか、と言ってもい

いと思います。

その答えは、はっきりしています。アブラハムによって、〈信仰によって義とされる〉という救いの道が開かれた、獲得された、残された、ユダヤ人にも異邦人にももたらされたと言っているのです。

〈信仰によって義とされる〉、これが最終結論。しかしそこへ至るあいだにパウロは三つのことを否定しています。第一に、〈行い〉によってではないと語ります（二～八節）。次に、〈割礼〉によってでもないと語ります（九～一二節）。そして、第三に、〈律法〉によって、詳しく言えば、〈律法の行い〉によってでもない（一三～一六節）と言うのです。

かくて、第四章、前半と後半をつらぬいて語られているのは、人は〈信仰によって義とされる〉、〈信仰のみによって義とされる〉です。これが、アブラハムの人生を通して示されていることなのです。

2　信頼と希望

行いも、割礼も、律法の行いも、人を義とはしない。人はただ信仰によって義とされる、それは分かったとして、それならそれは、どのような信仰によって、なのでしょうか。その信仰の中身もパウロは、アブラハムの生き方を通して明らかにしようとしています。

ところでこのところ何回か、説教で、〈信仰〉ということに触れています。例えば神の語りかけに対する〈応答としての信仰〉というようなことを少し前に申し上げました。先週は、〈信頼としての信仰〉に触れました。今日の箇所、とくに一七節以下でパウロが語っている信仰を、簡単な言葉で言えば〈希望としての信仰〉というように言ってよいと思います。

ただ信仰ということには、いま申し上げたようなことばかりでなく、例えば、それを言い表す、人の前で告白する、それによってこうむる不利益を自らに引き受けながらも告白する面があります。〈告白としての信仰〉です。教会は、これまでも、厳しい時代の中で信仰を言い表してきました。一九三四年、ナチ政権に抵抗していた、いゆる「告白教会」が発表した「バルメン神学宣言」など、その代表的なものです。教会は、信仰を、世に対して言い表しつつ歩んで行きます。これも信仰の持つ大切な一面です。しかし今日は触れません。今日は、〈希望〉という側面から信仰について考えたいと思います。

死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰は弱まりはしませんでした。彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。神

は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。だからまた、それが彼の義と認められたわけです（一七～二二節）。

アブラハムの信仰を〈希望〉という視点からとらえておかなければならないというのは、今お読みした中に、「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ」という言葉があるからです。希望するすべもないときに、なおも望み、信じた、したがって信仰とは希望、すなわち、望みを失わないことでもあるのです。

この箇所の背景にあるのは、創世記一七～一八章ですが、それ以前からアブラハムの人生を思い起こすことが必要です。

アブラハムがメソポタミアからカナン（パレスチナ）に移住してきたのは、彼が七五歳のときです。神の命令によります。

そのときアブラハムは、カナンの地で、土地を獲得し、子孫を増やし、神の祝福にあずかることが許される、それだけでない、その神の祝福と救いは、彼らイスラエルだけでなく、彼らを通して、世界の国民（くにたみ）に及ぶであろうとの約束を受けるのです。

しかし神の祝福の約束は、子供がいなければ、実現することではありません。しかし、肝心の子供が与えられないのです。じつは妻サラはメソポタミアにいる時から「不妊」（創世記一一・三〇）であることは知られていました。しかし、そういうことは、ままあることで、彼らも、いつかは、神が約束してくださっているのだから、生まれるだろうと考えていました。

しかし生まれない。彼らは諦めて、じつはこの一五年ほど前、サラの女奴隷ハガルによってアブラハムは子供をえていたのです。イシュマエルです。ところが神は、その後も、二人の間に子供の生まれることを約束するのです。アブラハムは百歳、妻サラ九〇歳になっていました。

創世記の記述には、そんなこと、ご冗談でしょうとばかり、アブラハムも、そしてサラも笑う場面があります。しかし、それらをふくめて、パウロは、アブラハムに信仰が豊かに宿っていることを見ています。根本的に意味での神への〈信頼〉をアブラハムに見いだしています。

それゆえに、パウロはこう書いています。アブラハムは「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ」た、と。そして「すでに自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰は弱まり」はしなかったと。なぜなら、「神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと〈確信〉していた」からです。

3　にもかかわらず

神は約束したことを神は必ず実現する、その力を持っている、この〈信頼〉から〈希望としての信仰〉は生まれます。

この希望は、決して、たんなる楽観主義ではありません。現実から夢の世界へと向かう、いわば逃げ込んでいくことではありません。パウロは、「既に自分の体が衰え

ており、そして妻サラの体も子を宿せないと知りながらも、その信仰は弱まりはしませんでした」と書いています。「既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せない」という人間的現実を知っていた、認めていた、受け入れていたのです。現実を直視していたのです。

現実を見ない、というのが、信仰なのではありません。そうではなくて、人間的現実を直視しつつ、同時に、もう一つの現実、神の約束の現実に目を向けるということが信仰です。そのようにして、この、あるいは、あの人間的現実もまた神の現実、神の約束の中にあることを忘れないことです。

とはいえ、このことは、私どもにおいて、ほとんど不可能に近いほど、難しいことです。アブラハムとサラが、女奴隷ハガルによって子供を得ようとしたことにおいてそれは示されています。あのとき、彼ら二人は、人間の現実を、神の現実において見ることをしませんでした。自分たちで、自分たちの現実を、何とかしようとしたのです。神の約束の実現を待つことはできませんでした。このことは、まったく同じく私どもにとっても困難なことです。疑いや空しさ、虚無の前に立たされます。しかしそこでこそ、私ども、神へと、私どもの信頼を投げかけたいのです。なぜなら、アブラハムの神とは、「存在していないものを呼び出して存在させる神」だから。無から有を造り出す神だからです。私どもの前にあるのは人間的な現実の不可能性です。しかしそうした現実に逆らって、そうした現実にもかかわらず、すべてを可能とする神にかけ、依り頼むのです。〈にもかかわらず〉、それが彼の信仰の秘密です。それが私どもの信仰でもなければなりません。

パウロは、今日の箇所の最後に、もう一つ、重要なことを記しています。

「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じればわたしたちも義と認められます。イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです（二三～二四節）。

パウロがここで言っていることは、アブラハムが神を信じ、それによって義とされたように、私どもも、神を信じることによって義とされる、二つは同じであるということです。

ただ、私どもキリスト者が、神を信じるという場合、御子イエスによって救いの御業をなしてくださった神を信じるということです。神が御子イエスの十字架の死と復活によって私どもの罪をあがない義としてくださったことを信じる、アーメンと言って受け入れるということです。

しかし聖書の神を信じるという点では同じです。この神は「死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神」（一七節）です。この神を信じるとはアブラハムが人間的な不可能と絶望に直面しながらも、それを乗り越える力を持つ神にすべてをゆだねたように、神を信頼することです。この神への信頼が、神への希望となるのです。

（二三年二月二六日）